

## 教室の内外（6）

——『伊勢物語』・『土佐日記』・『和泉式部日記』・『更級日記』——

吉 海 直 人

【要旨】今回は「教室の内外（6）」として、『伊勢物語』・『土佐日記』・『和泉式部日記』・『更級日記』の四作品に關しての論考を掲載した。

### ①『伊勢物語』第四段ひとりごと

〔前書き〕この章段で看過されているのは、末尾の「夜のほのぼのと明くる」である。「夜の明く」には二つの意味がある。一つは夜が明ける（明るくなる）であり、もう一つは翌日（午前三時）になるである。しかしながら「ほのぼのと」とあることにより、その語感が視覚的な明るさを想像させるらしく、何の疑問も抱かずに夜が明けると解釈されている。

それについて、むしろまだ暗い時間帯であるとする反対意見も出ている。ここで証拠になるのが十日の月の入りであった。これも従来無関心だったようだが、月が傾いた後で歌を詠じて帰ったのなら、軽視できないはずである。旧曆の一月十日の月の入りは午前三時前であった。これなら午前三時過ぎに帰ったとしてすつきり解釈できる。これを夜が明けてとすると、月が沈んでから四時間ばかり時間をつぶさなければならなくなる。物語だからそのまでの合理性は求められないのかもしれないが、明るくなってからという解釈は再考を要するのではないだろうか。

## 一、第四段の問題点

研究とは、先行研究の成果を尊重し、その上で先人とは違った独自の解釈を導き出すことである。それは非常に困難な挑戦でもある。『伊勢物語』を例にすると、片桐洋一という第一人者の膨大な業績が蓄積されている。それを見ると、大抵のことは既に論じられており、あえて挑戦しようという気をなくしてしまう若い研究者も少なくない。

かつては私もその一人だったのだが、最近になってようやく、それでも片桐先生の目に止まっていなかったことがあることに気付いた。所詮は落穂拾い（重箱の隅をほじくる行為）にすぎないかもしれないが、案外そんなところに重要な問題が潜んでいることもないとはいえない。そう信じて第四段を眺めていたら、はっと思いついたことがあるので、それについて述べてみたい。なお第四段については、その核となる和歌の二つの「や」について、それが反語なのか疑問なのかに研究の争点があった。逆にいえば、それ以外については、ほとんど問題視されてこなかった。ここでは末尾の「夜のほのほ」と明くる」という時間表現に注目し、そこから新しい解釈を提示してみたい。古典文

学における時間表現は案外重要だと思うからである。

まずはお馴染みの本文を掲載しておく。

むかし、東の五条に、大后の宮おはしましける西の対に、すむ人ありけり。それを。本意にはあらで、心ざしふかりける人、ゆきとぶらひけるを、正月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。あり所は聞けど、人のいき通ふべき所にもあらざりければ、なほ憂しと思ひつつなむありける。またの年の正月に、梅の花ざかりに、去年を恋ひていきて、立ちて見、あて見、見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に、月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひいでてよめる。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもと  
の身にして

とよみて、夜のほのほ」と明くるに、泣く泣くかへりにけり。  
(新編全集116頁)

## 二、「正月の十日」について

『伊勢物語』特有のといつか、短いわりに随分臚化・韜晦されたわかりにくい文章である。それを歴史背景や業平の人生を

参考にして読み解く作業が続けられてきた。ここでまず私が注目したのは、そういったことは別視点の、「梅の花ざかり」と「月のかたぶくまで」である。というのも、何故「梅の花ざかり」でなければならぬのか、ふと疑問に思ったからである。単純な疑問は大切にしたい。

これについては、昔男が通っていた東五条の西の対に、梅が植えられていたとされている。その証拠に（といえるかどうか）、この段が描かれた絵には必ずといっていいほど紅梅の木が描かれている。もちろんそんなことは本文には一切記されていないのだから、それこそ絵師の解釈（予定調和的な発想）ということになる。逆にここから類推すると、「月やあらぬ」歌の「春」は、具体的に梅の花によって象徴されていると読めそうだ。その方が「月」との対比がしっくりくるし、わざわざ梅が描かれていることの意味も納得される。

問題はここからである。では京都の梅の花盛りは、一体いつごろなのであろうか。本文に表記されている日付けは「正月の十日」であるが、それはあくまで去年のことであり、今年になつて男が訪れたのは「正月に」としか指定されていない。もちろんわざわざ「十日」とあるのだから、今年もその日に来た

と読むべきだという人もいるだろう。

ただ考えてほしい。去年の正月十日というのは、女がいなくなった日付けであつて、決して女と最後にあつた日ではないということ。男はあえて女のいなくなった日に西の対を訪れて、女の不在を詠じていると見ていいのだろうか。それとも「十日」に逢つた後で連れ出されたので、「十日ばかりのほどに」という回りくどい婉曲表現になっているのだろうか。

それはさておき、歌の解釈ではたいいてい女の在・不在（有無）を対比している。「去年を恋ひて」というのは、女との逢瀬を前提にしていることと見ている。だからこそ月や春が同じだとしても、女の在・不在によって心情は大きく異なるというのである。だがそれが十日では、既に女はいないのだから、明らかに間違つた設定になつてしまふ。そのことを真剣に考えてみてほしい。

ついでながら、男が「あばらなる板敷」にいたのは、おそらく廂の間に入れないからではないだろうか。部外者がいられるのは簀子だからである。また「立ちて見、ゐて見」も気になる表現である。男は一体何を見ているのだろうか。格子が降ろしてあれば、部屋の中をみることは不可能である。部屋の外だと、

見えるのは梅の花か月であろう。月に関係する表現として、「立待ちの月」「居待ちの月」がある。確証はないが、月を連想させる表現ではないだろうか。

そう考えると、昔男が女に最後に逢ったのは、十日以前(九日以前)ということになる。それが京都の梅の花盛りと整合するかどうかということである。何故そのことがコメントされないのであろうか。もちろん梅の種類や毎年の気候の違いもあるのではっきりしたことはいえないとしても、十日以前では早すぎると思えてならない。<sup>(1)</sup>特に紅梅は白梅より遅咲きとされていた。

### 三、「梅の花ざかり」をめぐる

私は梅の花盛りは十日より遅いと思っているが、この考えに本文の「月」が同調してくれない。たとえば旧暦正月十日の月は、かなり早い時間に出て(夕月夜)、午前二時頃には沈んでしまう。「月のかたぶく」というのは、必ずしも月の入りではないが、<sup>(2)</sup>それでも月の入りよりは少し早い時間になる。仮に昔男が十日の月がかたぶくのを見た後で帰ったとしたら、午前三時にはもう帰ったことになりそうだ。

これと符合するのが、歌の後の「夜のほのほのと明るる」である。これについては、これまで「夜が明ける」意味でとらえられてきたが、夜明けでは月が沈んだ後に数時間(四時間程度)の無駄な余白が生じてしまう。それに対して小林賢章氏や保科恵氏は、これを「翌日になる」つまり「午前三時になる」と解釈しておられる。<sup>(3)</sup>これだと十日の「月のかたぶく」時刻と見事に整合する。<sup>(4)</sup>

しかしここに『古今集』の詞書が入ってくると、話がややこしくなる。これまで『古今集』の長い詞書は、『伊勢物語』の記述にほぼ等しいとされてきた。確かにそうなのだが、ここでは日付の微妙な相違に注目してみたい。問題の『古今集』は以下のようになっている。

五条の後の宮の西の対にすみける人に、ほいにはあらでもの言ひわたりけるを、正月の十日あまりになむ、ほかへかくれにける。あり所は聞きけれど、えものも言はで、又の年の春、梅の花ざかりに、月のおもしろかりける夜、去年を恋ひてかの西の対に行きて、月のかたぶくまであらなる板敷にふせりてよめる。在原業平朝臣  
月やらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にし

て(七四七番)

『伊勢物語』には「十日ばかり」とあったものが、『古今集』では「十日あまり」となっている。この程度の違いは問題にもならないとする人もあるだろうが、ここであえて問題にしたい。というのも「ばかり」だと九日以前も許容されるが、「あまり」だと十一日以後にしかならない(九日は含まない)からである。

私は梅の花盛りとしては十一日以後がふさわしいと思っている。その反面、月の入りは一日経つと五十分ほど遅くなる。つまり数日後には夜の明ける頃に月も沈むことになる(逆に九日前だと月は随分早く沈んでしまう)。従来「夜が明ける」説は、十四、五日頃なら成立するようだ。

これに類似したことが『土佐日記』一月十一日条にあるので、それも見ておきたい。

十一日。暁に船を出だして、室津を追ふ。人みなまだ寝たれば、海のありやうも見えず。ただ、月を見てぞ、西東をば知りける。かかるあひだに、みな夜明けて、手洗ひ、例のことどもして、昼になりぬ。(27頁)

ここは暁に船出しており、まだ暗いので月の位置で東西を知ったとある。ここだけを見れば、西に傾く月によって、方角

を知ったと解釈して納得するところである。しかし『伊勢物語』四段で、十日の月は午前二時頃沈むことが脳裏にあるので、十一日にしても月は暁になる前に沈んでいるのではないかという不審を抱いてしまう。これについて新編全集の頭注には何も触れられていなかったが、さすがに萩谷朴氏『土佐日記全注釈』では、

奈半利における陰曆正月十日の月を、昭和三十九年に例をとって算定すると、翌十一日午前三時七分に沈むことになつてゐる。(182頁)

と月の入りの時刻を明記されている。これを根拠に、萩谷氏はこれを脚色虚構としておられるが、暁に船出したのであれば、ぎりぎり西に沈む直前の月が見えた可能性もある。いずれにしても、十一日(十日の暁に日付が変わる)の月は午前三時前後に沈むことに留意していただきたい。

それにしても単純に十日に特定(限定)できないこと、九日以前にも十一日以後にもそれなりの問題があることが見えてきた。従来は矛盾しているにもかかわらず、十日を指針として単純に考えていることもわかってきた。ここで発想を変えてみたらどうだろうか。

従来は女の在・不在をポイントにしていたが、思い切つて去年も今年も女は不在だったとしたらどうだろうか。というのも男が女の不在を知ったのは、誰かから聞いたのではなく、十日に女のもとを尋ねていたからだとは考えられないだろうか。

一年の経過の間に変つたのは、本文では「あばらなる板敷」である。「あばらなる」とは、①隙間が多い、まばらだという意味と、②荒れ果てているという意味がある<sup>(5)</sup>。ここでは女がいなくなった後、調度品などが片付けられてがらんとしたと解されている。大后の宮の西の対であるから、荒れ果てるはずはないと考えられたのであろう。

### まとめ

以上、これまで問題にされなかった(片桐先生も言及されていない)「梅の花盛り」と「月のかたぶく」に注目して、その問題点をいろいろと指摘してみた。

「花盛り」の時期の特定によつて日付が動く可能性があるし、それに連動して月の入りの時刻も変容することは納得していただけであらうか。それを考慮した上で、さて男は何日頃に西の対を訪れたとすべきであらうか。その上で、月の入りと男の

帰宅時間をきちんと整合させていたきたい。もちろん『伊勢物語』にそこまでの整合性を求めること自体愚問といわれそうだが、一度は真剣に絞り込んでみてはどうだろうか。

ついであるが第四段の絵を見ると、決まつて円い月が描かれている。しかしながら十日の夜ではどう考えてもおかしい。むしろ十五日の夜ならびつたりする。

### 独りごと

第四段について、「夜のほのほのと明くる」の解釈が間違つていた可能性が浮上してきた。古文の教科書にも採用されている箇所なので、まさかそんなことがあろうとは思わなかった。あるいはそれが常識の落とし穴なのかもしれない。むしろ教科書に掲載されているものほど、注意しなければならぬ。

仮に「明くる」の解釈が午前三時に改訂されたとすると、それが十日の月の入りと連動することになる。幸い十日の月の入りは午前三時より前なので、その意味でも適合していることになる。そこから次に梅の花が気になった。最初は京都における梅の満開がいつかということだったが、次に月の入りというこ

とから、梅は見えなくなること気付いた（暁闇・明けぐれ）。その途端、『古今集』にある、

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる  
（四一番）

が想起された。梅は見えなくても香は薫っていたはずだからである。ひよつとするとこの歌は、第四段を解釈するのに非常に参考になるかもしれない。

おそらく描かれていない「梅の香」こそは、女を想起するきっかけになっているのではないだろうか（橘でなくても「昔の人の袖の香ぞする」は可能）。第四段を考えながら、そんな想像にふけてみた。

〔注〕

（1）というのも、令和の典故となっている大宰府の梅花の宴（陰暦正月十三日・新暦二月八日頃）に関して、大宰府の梅の満開はもつと遅い（新暦三月初旬）とされているからである。京都の梅の見頃はいつであろうか。

（2）思いつきだが、「月やあらぬ」に「月が傾いて見えなくなつた」（不在）ことが掛けられている可能性はないのだろうか。

（3）小林賢章氏『暁』の謎を解く』（角川書店）平成25年3月、

保科恵氏「勢語四段と日附規定——「ほのほのとあくる」時刻——」二松学舎大学論集58・平成27年3月、小林賢章氏「ホノボノ考」同志社女子大学学術研究紀要70・令和2年1月。小林氏は「夜の明く」から、保科氏は「ほのほのとあくる」から論じておられる。

（4）ただし九日以前の月であれば、午前三時までに時間的余白が生じてしまう。まして十一日以降だと、月が傾く前に午前三時を迎えることになりかねない。ついでながら「ほのほのと明く」のすべてが翌日になる意味ではなさそうだ。身近な『蜻蛉日記』の二例など、「夜が明ける」の意味で用いられているとしか思われないので、「夜の明く」と同様、両義的に柔軟に考えるべきであろう。

（5）「あばらなる」は、第六段にも「あばらなる倉」として出ている。この場合は単純に「荒れ果てた蔵」と訳されているものもあるが、第四段との整合性を考えると「がらんとした蔵」とすべきではないだろうか。

〔追記〕保科恵氏『入門平安文学の読み方』（新典社選書）でも、同じような疑問のもとに解説されている。

②『土佐日記』冒頭を読む

〔前書き〕男（紀貫之）が女の立場・視点から旅の日記を書き綴った体裁の『土佐日記』。ここから女流日記文学が芽生えるとされているが、もっと大事なのは仮名で書かれていることであろう。特に和歌は仮名表記がふさわしいし、それによって漢詩の世界と決別（対立）し、言語遊戯という独自の発展をとげることになるからである（『万葉集』とも決別する）。

もう一つ、内容とは別に、紀貫之自筆の『土佐日記』が室町時代まで存在したことも文学史の奇跡である。もちろん『土佐日記』が子女の教科書として使われたのなら、貫之やそれ以外の人によって何度も書写されたはずである。原本が一冊（二冊の原本にまで遡る）というのは研究者の幻想であろう。第一、貫之の字体など誰にもわからないのだから。

その貫之自筆本を藤原定家や息子の為家が書写しているわけだが、定家の書写は必ずしも忠実ではなく、美意識によって私に校訂していることがわかる。それに対して為家は忠実に書写している（と信じられている）。だからこそ定家本を差し置いて『土佐日記』の底本（テキスト）として使用されているので

ある。ここから、定家本には定家による本文校訂が含まれている可能性が高いことを学びたい。それは何も『土佐日記』だけのことでない。『伊勢物語』や『源氏物語』の定家本にして、同じことである。

一、冒頭について

『土佐日記』の冒頭は高校古文の教科書にも採用されており、学習したことのある人が多い教材である。まずはお馴染みの冒頭本文を紹介しよう。

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。その年の師走の二十日あまり一日の日の、戌の時に門出す。そのよし、いささかものに書きつく。

ある人、県の四年五年果てて、例のことも皆し終へて、解由など取りて、住む館より出でて、船に乗るべきところへわたる。かれこれ、知る知らぬ、送りす。年ごろよくくらべつる人々なむ、別れがたく思ひて、日しきりにとかくしつ、ののしるうちに夜更けぬ。

二十二日に、和泉の国までと平らかに願立つ。藤原のときぎね、船路なれど馬のはなむけす。上、中、下、酔ひ飽



きて、いとあやしく、潮海のほとりにてあざれあへり。

(15頁)

この本文で必ず生徒に注目させ、文法的な相違のあることを指摘するのが、冒頭の「すなる」と「するなり」である。用法の異なる二つの助動詞「なり」が、都合よく一文に出ているからである。第一学習社の「国語総合」でも、脚注の「問」に、「男もすなる」の「なる」と「するなり」の「なり」とは、意味・用法がどのように違うか。という設問として出ている。

その模範回答として掲げられているのは、

前者はサ変動詞の終止形に接続しているから伝聞の助動詞「なり」の連体形、後者は同じくサ変動詞の連体形に接続しているから断定の助動詞「なり」の終止形である。

であった。丁度ここは貫之が『土佐日記』の作者を女性に仮託しているところなので、「男もすなる」という伝聞表現が、そのことを考えるきっかけになるわけである。

## 二、定家本の冒頭

ところが大学ではそれでは済まされない。というのも『土佐

日記』の最古写本である藤原定家書写本(前田家所蔵・国宝)の本文は、

をともすといふ日記といふ物を、むなもして心みむとてするなり。それのとし、はすのはつかあまりひとひ日のいぬの時にかどです。そのよしいさ、かに物にかきつく。

となっており、最初の「すなる」が「すといふ」になっており、これでは「なり」の比較ができない。しかも定家本では「といふ」が連続することになるが、何故それを避けようとはせず、「なる」を抹消したのか、定家改訂の意図がよくわからない。逆に「といふ」の繰り返しを避けるために「なる」にしたというのなら納得できるのだが。

ここで『土佐日記』の伝本の特殊性について大まかに紹介しておきたい。というのも『土佐日記』は、紀貫之自筆本が室町時代まで現存していた稀有な(幸運な)本だからである。その自筆本も三条西実隆が臨模した後で散逸しているが、それまでに何度か忠実に写されたことで、現在もほぼ百パーセント(字母まで)貫之自筆本にまで遡れるとされている。

平安時代の代表的な『源氏物語』も『枕草子』も、自筆本は早々と散逸しており、現在ではかなり時代の下った写本でしか

読めないことを思うと、『土佐日記』は奇跡としかいいようのない残り方をしているといえる。ただし原本は一冊ではなく、自筆本が複数存在した可能性も否定できないし、貫之の自筆であることも証明は不可能である。

現存する最古の書写本は、前述のように藤原定家による定家書写本（文暦二年）であった。それに続くのが定家の息・為家書写本（嘉禎二年）である。この本は長い間所在不明であったが、一九八四年に突如として弘文荘（古書店）に持ち込まれ、入札会（オークション）で大阪青山短期大学が七五〇万円という高値で購入して話題になった（現在は国宝指定）。

それ以前は、書写年代の下る青溪書屋本（桃園文庫所蔵）が最善本（自筆本を忠実に書写した本）とされていたが、為家本の登場によって貫之自筆本との距離は一層縮まった。その反面、最古の定家書写本は原本を改訂してでも自身の美意識を絶対視しているものであることがわかってきた。だから最古であっても、藤原定家の筆であっても、『土佐日記』の底本（テキスト）として教科書にも使用されることはないのである。それは決して文法問題作成の便宜で忌避されているわけではなかった。

こういった『土佐日記』の書写態度から判断すると、『伊勢

物語』にしても『源氏物語』にしても、定家書写本は到底原本には遡れない本文と考えざるをえない。しかしながらそれに代わる善本がないということで、やむをえず定家本を使用している現状である。決してすぐれた本文を有しているから用いているわけではないのだ。ここに積極的に古典の書写校合を行った定家の功罪が存するといえる。

### 三、帰京の遅延

さて、冒頭本文を読めばわかるように、『土佐日記』は土佐守として赴任していた貫之が、任終えて京都に帰京するまでの五十五日間の旅日記として記されている。『更級日記』もそうだが、何故赴任時の記録ではなく、帰京時の記録なのだろうか。あるいは帰京時の記録に赴任時の記憶は反映されていないのだろうか。

それはさておき、具体的には承平四年（九三三年）十二月二十一日に出發してから、承平五年二月十六日に京都に到着するまでである（年をまたいでいる）。本来なら土佐・京都間は二週間程度の旅程であるが、この折は天候不順などによってかなりの日数を費やしている。そのお蔭で『土佐日記』の分量も倍

増しているのであるから、天候不順に感謝したいところである（もちろん虚構が混じっている可能性も多分にある）。

もう一つ不思議なことがある。普通、受領の任期は四年である。それに往復の行程や役所の引継ぎを計算しても、たいした日数にはなるまい。ところが貫之は任が果てた後、一年近くも帰京が遅れている。本文を見ると、「県の四年五年果てて」とあることに気付く。通常なら「四年果てて」でいいはずである。それを「四年五年」としているのは、決して臆化表現などではあるまい。どうやら後任者（新国司）となった島田公鑿（きまみつき）の到着が大幅に遅れたことが原因らしい。

本来なら一月の除目（じもく）（県召（あがた））で決定するはずだが、公鑿は四月に任命されたらしい。ここで既に三ヶ月も遅れている。それでも十二月に交替しているというのは、そこに八ヶ月もの空白が存することになる。その間、公鑿は一体何をしていたのだろうか。あるいは流刑の地でもある遠い土佐への赴任（しかも船旅）を躊躇していたのだろうか。

貫之にしても帰京が一年も遅れたのであるから、かなり立腹していたと思われる。ましてその間に愛娘が亡くなっている（ことになっている）のだから、公鑿に対する憎悪が描かれて

いても不思議はないはずだ。

#### 四、仮名表現と和歌

ところで『土佐日記』には五十七首の和歌が含まれている。わずかに五十五日間での数字であるから、歌数はかなり多いといわざるをえない。どうもこのことと仮名書きとは無縁ではなさそうである。従来は女性に仮託したことはかりが重要視されていたが、それ以上に仮名で書くことのメリットを考えてみたい。そのことは小松英雄氏によっても既に表明されている。<sup>①</sup>

加えて貫之が歌人であり、『古今集』の撰者の一人であり、しかも仮名序の作者であることを思うと、貫之は『古今集』撰集作業を通して、仮名書きの魅力（メリット）を誰よりも体得していたのではないだろうか。一字一音の仮名が、和歌の表出に都合がいいこと（『万葉集』にはなかった）のみならず、散文においても自己の心情を吐露するのに便利であることを。もちろん掛詞などの言語遊戯（技法）にも非常に都合がいい。

そういった貫之の新たな試みを、何故か男性公人は継承せず、仮託された女性達がそれを積極的に用いて、日記の世界を開拓していったというわけである。ここに文学者貫之の仕掛けがあ

ると見たい。<sup>②</sup>

もつとも『古今集』を見れば、既に男が女の立場で歌を詠んでいる例が出ている。貫之の「人はいさ」歌にしても、宿の主は必ずしも女ではあるまい。そう考えると、女の立場で日記を書くことも、この時代にはさほど稀有なことではなかったことになる。文学史では女性仮託を過剰に強調しているように思える。『土佐日記』は決して記録ではなく、創作を含む日記文学なのである。

### 補遺 紀貫之が作者である証拠

ところで『土佐日記』が紀貫之の作だということは、高校古文の教科書にも載っていることだが、具体的にどんな資料によつて保証されているのだろうか。

一つには貫之の息子・時文と交流のあつた惠慶法師の家集の一九二番の詞書に、

つらゆきがとさの日記を、  
ゑにかけけるを、いつとせを  
すぐしける、家のあれたる心を

とあることがあげられる。これによつて貫之が『土佐日記』を書いたこと、また末尾帰京章段の絵を含む日記絵が書かれてい

たことがわかる。残念なことに絵の実物は現存していないが、これも原本の一つといえるであろう。

また『後撰集』には、『土佐日記』の中で読まれている「照る月の」歌と「都にて」歌の二首が貫之作として収録されており、やはり『土佐日記』が貫之の日記として認識されていたことがわかる。実はこんな外部資料が存することはむしろ稀である。あるいは息子の時文が、あえて父貫之の偉業を書き留めているのかもしれない。

もう一つ、貫之自筆本を書写した藤原定家本の奥書に、「紀氏自筆本蓮華王院藏本」「有外題土左日記貫之之筆」とあることも証拠としてあげられる。「貫之之筆」というのは、自筆であることと同時に貫之が作者であることを証明しているわけである。

以上の資料により、貫之が『土佐日記』の作者とされているわけである(反証は見当たらない)。なお定家によれば、書名は『土左日記』ということになるが、これは単なる当て字であろうか。

〔注〕

(1) 小松英雄氏『古典再入門——『土佐日記』を入りぐちに  
して』(笠間書院)平成18年11月、『土佐日記を読みなおす』

(笠間書院)平成30年6月。

(2) そう考えると、『竹取物語』や『伊勢物語』の作者として貫  
之が想定されているのも納得できる。

### ③和泉式部の謎

#### 一、問題提起

和泉式部と敦道親王の恋——兄為尊親王の輪廻——は、  
最初から絶望の淵にあった。二人の未来には夢も希望も存在せ  
ず、あくまで刹那的な充足としての「つれづれ」を「慰め」る  
手段であり、「はかなき」「世の中」の一コマでしかありえない。  
自然の推移を背景にして、「折」を過ぎぬ贈答によって構築さ  
れた世界は、一見愛の讃歌に見まがうものだが、内面では人間  
の孤独と無常を基底として展開している。自己を客観化する方  
法を獲得した作者のまなざしは、氷のように冷ややかで、男女  
間の感傷も幸福も、すべて一過性のものとして認識されている。

恋多き和泉式部は、その実、恋によっては決して充足されぬ女  
性なのであった。ただ彼女の詠じた歌のみが、千年の歳月を越  
えて永遠の救済を叫び続けている。

『和泉式部日記』のオーソドックスな問題、例えば物語なの  
か日記なのかとか、自作であるか他作であるかといった論争、  
あるいは日記文学の特質探究等は、主題にかかわる重要な研究  
テーマであり、今後もさまざまに論議されるであろう。私自身、  
日記文学には制作の依頼者がいる(『蜻蛉日記』は兼家、『紫式  
部日記』は道長)という仮説を抱いているが、ここではそう  
いった根源的な問題は棚上げにして、やや遠い外野席から日記  
を見つめ(岡目八目)、少々奇異な野次を飛ばしてみたい。

#### 二、和泉式部の呼称の謎

和泉式部の「和泉」は、夫橘道貞が和泉守だったことによる  
と見て間違いないまい。しかし「式部」に関しては、父大江雅  
致の官職からきているという説があるものの、確固たる証拠は  
見当たらない(清少納言の「少納言」も未詳)。むしろ女房名  
が必ず父・兄弟・夫の官職から付けられているという幻想を、  
そろそろ打破すべきではないだろうか。

式部の宮仕えにしても、『拾遺集』の作者表記を唯一の根拠にして、父が太皇太后昌子の大進であり、母介内侍も昌子の乳母(乳母子?)であったことから、少女時代に御許丸という童名で昌子に宮仕えしていたと安易に考えられてきた。しかしこれも実は想像の域を出ないものであった。式部が宮仕えをしていた方が、研究者にとつてなにか都合がいいけれども、しかし宮仕え経験のない平凡な娘として、橘道貞と結婚した可能性も否定できない。少なくとも日記にある「今さらさやうにならひなき有様はいかがせん」には留意しておきたい。

また和泉と称されているからといって、式部が夫の任国和泉国に下つたということも、実は確たる証拠が見当たらない。もともと和泉式部程度の女性の人生など、わざわざ記録に残されるはずもなく、未詳で当然なのである。つまり式部の人生は、むしろ日記や歌から抽出・想像されたもので、読者(解釈者)の都合によつて如何様にも変化する危険性を有しているのである。そこに伝記研究の落とし穴(予定調和的(都合主義)があつた)。

ただし為尊・敦道両親王との恋の繰り返しにより、夫からは離縁され、父からも勘当されてしまったことは事実らしい。し

かしながら、式部が上東門院彰子に宮仕えしたのは、既に両親王がなくなつた後であり、それ以前に女房としての和泉式部を資料から確定できない、ということをはつきり認識しておかねばなるまい。当然、両親王との恋愛中は女房名では呼ばれていないわけである。それにもかかわらず、離縁した男を想起させる「和泉」という女房名で通している点こそが問題なのである(式部という呼称は、何故か娘にも継承される)。

### 三、和泉式部の経済背景の謎

さて父から勘当され、夫からも離縁された和泉式部であるから、普通ならばその日からの生活にも困るはずのだが、不思議なことに侍女達が去つた形跡もなく、以前とほとんど変わらず生活を続けているようである。子が親に勘当された時など、普通は乳母の家にやつかになるようである。その場合、あの『源氏物語』の夕顔の如く、相当質を落とした生活を強いられる。現実問題として、果たして式部の生活費等は一体どこから出ていたのであるうか。作品の鑑賞には無縁かもしれないが、こういつたことについてでも目をつぶっていると、平安時代そのものを見誤つてしまう恐れがある。

もし仮に、群がる男達の貢ぎ物をあてにしているとしたら、だからこそ複数の男性と交際していたとしたら、それはまさに売春まがいの生活であろう。当時の結婚は通い婚であり、むしろ女性側の方が男に経済援助をするのが普通であった。だから可能かどうかは別に、男性に生活一切の面倒を見てもらうことは、相対に新しい生き方ということになる。そうでなくとも、経済基盤のない式部に男性が言い寄っているとしたら、そのことも普通の恋愛形態ではないことになる。それが式部の式部たる所以なのであるか。

「近くて親はらからの御有様も見聞こえ」とある点、ひよつとすると父から勘当されたということも誇張表現なのかもしれない。つまりたとえ別居してはいるものの、経済的援助は父から受けていたかもしれないのだ。あるいは式部は姉妹と同居しているらしいので、その姉妹の邸にでも世話になっているのだろうか。式部は住む家を持たないからこそ、最終的に敦道邸に引き取られることを承諾したとも考えられる。

もしこの考えが正しければ、敦道の死後に彰子のもとに出仕したのも、単なる精神的な慰めだけではなく、実は女というか母娘の自活という生々しい現実のためなのかもしれない。当然

藤原保昌との再婚も、父（後見人）の死によるなど、その同一線上で考えた方がよからう。たとえ保昌に対して愛情が湧かないとしても、だからといって不幸な結婚とは断言できない。少なくともそれによって老後の生活が保障されるわけであり、むしろ人も羨む良縁と見ることもできる。有名な「物思へば」歌にも、そういった成立の背景を設定してみると面白いのではないだろうか。こういった俗な考え方は、文学を冒瀆するものだろうか。

#### 四、和泉式部の邸の謎

和泉式部は当初三条の邸に住み、そこに夫である橘道貞を通わしていた（一夫多妻であるから、当然道貞には他にも妻がいた）。ところがその夫から離縁され、そのために父から勘当されてその邸を出たらしい。どこに移ったかは不明であるが、「人々方々住む所」とあることから、どうも式部個人の持ち家ではないらしく、やはり姉妹（はらから）の邸に転がり込んで居候していると思われる（式部のはらからは親から独立していることになる）。そこに敦道親王が通ってきているのである。当時の受領階級の生活は未詳部分も多いが、「西の妻戸」等と

あることからして、どうやら寢殿造りの邸に住んでいるらしい。寢殿造りは必ずしも権力の象徴ではなく、案外貴族一般の建築様式だったのであろうか（『源氏物語』帚木巻における紀伊守の邸宅は相当立派らしい）。もつとも式部が居候だったとしたら、寢殿には主人たる姉妹が住んでいたはずである（あるいは受領として任国へ赴任していたとしたら、留守番として寢殿に住めるかもしれないが）。だから使用人達も「騒がしの殿のおもとたちや」等と文句を言っており、必ずしも式部を主人として忠実に仕えてはいない。

敦道親王の邸（東三条院の南院、一説には冷泉院の南院）の北の対に入ってから、北の方というよりは敦道に仕える召人（愛人）として過ごした。もつとも真の北の方（大納言藤原濟時女）は入れ違いに実家に帰ってしまったのだから、実質的には妻（権北の方）であったかもしれない。面白いことに、濟時女は結婚後すぐに敦道邸に入居しており、通い婚という形態をとっていない（敦道が東宮候補だったということで説明がつくのだろうか）。しかも若くして北の方（上の御方・内）と呼ばれているものの、実際には北の対にも住んでいない（北の方の用法は再考を要する）。

その後、敦道親王が亡くなると、式部はそこに永住することもできず、再びどこかへ移ったらしい。藤原保昌と再婚した後は、保昌の邸に住んでいたようだが、こうして住居を辿つても、何とも不安定な一生であったことがわかる。

### 五、小式部内侍の謎

為尊・敦道両親王との愛（まさにシンデレラストーリーの具現）に、式部がはかなき時間を費やしていた頃、実は彼女は既に一人ならぬ子供の母であった。小式部以外に何人の子供が存在したかは不明確であるが、少なくとも道貞との間に「誰が親」と疑われるもう一人の子供が誕生していたはずである。また石蔵の宮は敦道親王の御子（落胤の場合、多くは幼児期に法師にするようである。また幼児が病弱な場合、出家の功德によつて死を免れようとすることも多かった）であろう。あるいは為尊親王との間にも、夭折した御子がいたかもしれない。いずれにしてもこの幼い娘（小式部）は、一体どこでどのように生活していたのであろうか。そして親王達との恋に熱中している母をどのように見ていたのであろうか。

娘のことは、日記には完全に欠落している。「昔のやうにも



見ゆる人」を小式部とする説もあるが、もちろん決定的ではなく、あるいは為尊親王の御子かもしれない。男女の恋愛に幼児

の存在が邪魔なので、意識的に描かれなかったのであろうが、それにしても式部の母性をどのように把握したらいいのであるうか。従来の研究は、このことを度外視しているように思えてならない。おそらく娘は母と同居しておらず、どこか別の場所

で乳母にでも養育されているのであろう（実家の祖父母の所かもしれない）。もし仮に同居していたとしても、敦道親王に引き取られる際には伴わなかったはずである。和泉式部は女として恋に生き、母としての愛情はあまり豊かではなかったのではろうか。

いやそうではあるまい。もしそうなら、後に小式部が早世した時、あれほど悲しむことはなかったであろうし、あれほど哀切な挽歌を詠むこともなかったはずである。本来貴族の女性は、我が子を自らの手で養育せず、だからこそ乳母が存在するのである。式部の場合も、恋愛に忙しかつたので我が子を育てられなかったのではなく、乳母が養育していたからこそ、自由に恋愛に没頭することが可能だったのだ。式部は恋のために我が子を犠牲にしたというのは、あまりにも現代的なとらえ方である

う。

## 六、姫君と女房の間

和泉式部というと、その女房名に引かれて、どうしても女房文学のイメージを抱いてしまう（女流作家がすべて学者の娘であることは重要。しかしながら為尊親王との関係にしても、『栄花物語』鳥辺野巻には「御夜歩きのしるしにや、いみじうわづらはせ給て、うせ給ぬ」とあり（他に新中納言という女房にも通っていた）、日記にも「故宮をも、これこそみて歩きたてまつりしか」と出ているので、為尊が式部のもとに通っていたようである。敦道親王の場合も、決して親王と女房という上下関係では把握できない。つまり式部は、宮仕えしていて宮の手が付いた（宮中のアバンチュール）のではなく、形態としては完璧に通い婚であり、寝殿造りの邸の姫君という立場で宮を迎えられているのである。

それにもかかわらず、同時期に複数の男性を通わしているところに、平安朝の姫君らしからぬ式部の特徴があった（それは敦道親王を繋ぎ止める手管でもあったろう）。そのために身分違いとか、好き者といった世間の批判を浴びることになる。そ

れは敦道親王の呼称が「宮」で統一されている点にも認められる。式部の恋人は男ではなく、あくまで宮でなければならなかった。しかしながら式部は決して弱い立場ではなく、むしろ一对の男と女の愛の構造を認めざるをえない、「同じ心」がキーワードとして多用されている。その点にこそ『和泉式部日記』の主題があり、だから宮邸に人居する（召人として宮仕えする）時点で、日記は幕を閉じてしまうのである。あるいは日記制作は、敦道親王の遺言だったのかもしれない。

さて式部の場合、母が内侍であることも重要である。その職掌上、母に言い寄った男性も多かつたはずだからである。事実、大江雅致以外との男性関係があつたらしい。その母の血であろうか、娘式部のみならず孫も宿命的に内侍となり、小式部内侍と呼ばれた。そしてやはり宮仕えを通してあまたの男性と関係し、遂に産後の肥立ちが悪かつたために若死にしてしまう。面白いことに、式部にも乳母としての出仕話があつたらしく、もその時彼女が乳母になっていけば、三代統いて内侍職に就任していたかもしれない。

それにしても女房階級には、平凡な結婚・平凡な人生など望めないらしい。もつとも和泉式部の場合は、彼女自身が平凡な

受領の妻としての一生を拒否したのだが。その代償として彼女が得たものは、まさに和歌文学の達成であつた。

## 七、日記の和歌

『和泉式部日記』も文学史的には日記文学のジャンルに定位されており、研究の中心は自作か他作かに絞られている。それとは別に現存諸本の題簽からは、かつて『和泉式部物語』として長く読まれていたことがわかっている。これを日記文学の範疇にひき留めているのは、日記研究者の中にある種の願望・幻想が働いているからではないだろうか。

いろいろな事象が物語の方に向いているにもかかわらず、これを日記文学に縛り付けておきたいのは、そもそも日記文学の絶対数が少ないからであろう。しかしそういつた決め付けは、作品にとつてかえって不幸なことではないだろうか。私は日記文学にしても、虚構をこそ根底に据えるべきだと思つている。言い換えれば、日記も日記風に書かれた物語（フィクション）として読める（読まなくてはならない）ということである。

そこで本論では『和泉式部日記』を物語として読む、もつといえは『和泉式部日記』を日記の呪縛から解放して、『和泉式

部物語』として読み直してみてもどうか、ということ提起したい。

まずは『和泉式部日記』という作品について、いささか私見を述べておきたい。『和泉式部日記』の特徴の一つとして、所収されている和歌の多さがあげられる。比較的短い作品であるにもかかわらず、実に一四五首もの和歌が収められているからである。当然、敦道親王との恋の贈答歌が主なのだが、それは一〇〇三年の正月から十二月までのわずか九ヶ月ほどのできごとであった。その四年後の一〇〇七年に敦道親王は亡くなっている。これは和泉式部の人生を約五十年として、十分の一にも満たない二人の凝縮された愛の記録であった。

それに対して『蜻蛉日記』は、所収和歌二六一首と歌数は多いが、そこには二十一年間もの兼家との生活が記されている。『更級日記』など四十年にも亘る長い人生の日記であるものの、それにしては所収和歌が八十八首と意外に少ない。その孝標の娘の作とされているのが『夜半の寢覚』であるが、果たして孝標の娘の歌人としての力量はどうなのであるか。

ここで具体的な数字を出してみよう。『和泉式部日記』の歌を調べてみると、彼女の家集にある歌は、式部五十六首で宮は

わずか七首である。逆に家集にない歌は、式部十七首で宮は六十三首と増大している。この数字を見ると、式部の歌はともかくとして、宮の歌の大部分は『和泉式部日記』にしか掲載されていないことになる。

仮にこれが本当に宮の歌であれば、計七十首にもなるので、小さいながらも宮の家集が編める分量である。逆にこれが宮以外の人の創作だとするとどうだろうか。もちろん一番には式部自身の創作が考えられる。それ以外に、誰か別の人が、『和泉式部集』をヒントにして創作することも可能ではある。そこで川瀬一馬氏は、時代を下らせて藤原俊成の創作という説を出しておられるが、それを否定するだけの証拠は見当たらない。俊成の歌人としての力量は申し分ないので、俊成によって創作された『和泉式部物語』としても十分楽しめる作品なのである。

#### 八、敦道親王との逢瀬

もともと和泉式部は、敦道親王の兄為尊親王と恋愛関係にあった。その記録は『和泉式部集』の中には残されていない。しかも為尊親王とのことは日記にも書かれていない。その兄がいきなり亡くなった後、今度は弟の敦道親王が通って来るよう

になる。それが冒頭の、

夢よりもはかなき世の中を、嘆きわびつつ明し暮すほどに、

四月十余日にもなりぬれば、木のくぐらがりもてゆく。築

土の上の草あをやかなるも、人はことに目もとどめぬを、

あはれとながむるほどに、近き透垣のもとに人のけはひす

れば、たれならむと思ふほどに、故宮にさぶらひし小舎人

童なりけり。

（新編全集17頁）

である。小舎人童は為尊親王という主人を失った後、

いとたよりなく、つれづれに思ひたまうらるれば、御かは

りにも見たてまつらむとてなむ、帥宮に参りてさぶらふ。

（17頁）

と、弟の帥宮（敦道親王）に仕えていた。その理由として「つれづれ」の「御かはり」とあるのは、小舎人童だけでなく、和

泉式部にもあてはまりそうである。これは『源氏物語』同様に

亡き為尊親王の（ゆかり）の物語という設定になっている。

冒頭で小舎人童は、帥宮から橘の花を託されていた。それは

古歌、

五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

（古今集一二三九番）

を想起させるものである。それに対して和泉式部は、

薫る香によそふるよりはほととぎす聞かばや同じ声やした

ると

（18頁）

と大胆な（挑発的な）歌を贈っている。「同じ声」が聞きたい

というのは、逢いたいということだからである。ここから二人

の歌のやりとりが開始されるわけだが、和泉式部は「つねはと

て御返り聞こえさせず」（19頁）という恋愛テクニクも心得

ていた。

新たに始まった敦道親王との交際について和泉式部は、

もともと心深からぬ人にて、ならばぬつれづれのわりなく

おほゆるに、はかなきことも目とどまりて、

と、為尊親王を失った空虚さを和歌の贈答によって紛らわそう

としている。「もともと心深からぬ人」という客観的叙述があ

るものの、かえってそれが効を奏したのか、

かくて、しばしのたまはする、御返りもときどき聞こえさ

す。つれづれもすこしなぐさむ心地して過ぐす。（20頁）

という精神状態になっている（「つれづれ」「なぐさむ」がポイ

ント）。こうしていよいよ敦道親王が女の家を訪れ、そのまま、

かるがるしき御歩きすべき身にもあらず。なさけなきや

うにおぼすとも、まことにものおそろしきまでこそおぼはれとて、やをらすべり入りたまひぬ。(22頁)

と女のいる廂の間に入り込む。これは敦道親王の色好み発露であろうか、それとも和泉式部の誘いのテクニクであろうか。いずれにしても、ここから二人の濃厚な逢瀬が描かれると期待しがちだが、実のところ『和泉式部日記』には、まったくといっていいほど濡れ場(逢瀬)は描かれない。この場面にしてもその後、

いとわりなきことどものたまひ契りて、明けぬれば帰りたまひぬ。(22頁)

と、さつさと帰っているのだから、期待はずれの作品ということもできる。というより『和泉式部日記』という作品を、読者は愛欲生活を赤裸々に描いた日記だと勘違いしているのである。さらに信じがたい事実がわかった。日記の中で、二人が何度くらい逢瀬を持っているのかを数えてみたところ、なんとたったの十回程度であった。九ヶ月間の日記であるから、平均すると一ヶ月に一度くらいしか逢瀬を持っていない計算になる。しかも肝心の逢瀬場面すらほとんど描写されない。これならむしろ『源氏物語』の方がよっぽど濡れ場を描いているといえそう

だ。

最初の逢瀬にしても、その後三日間続けて通うのが正式な結婚の証であるが、あっさり「日ごろになりぬ」(24頁)とあって、敦道親王は三日どころか、その後しばらく通ってこなかった。要するに日記は、敦道親王との濃厚な恋愛を描きたいのではなく、二人の歌のやり取りを描いているのである。そのためには通常の恋愛ではマンネリ化してしまうので、むしろ障害のある間遠な通いとして描かれているのであろう。

#### 〔参考文献〕

- ① 山中裕氏『和泉式部』(吉川弘文館) 昭和59年5月
- ② 清水好子氏『恋歌まんだら和泉式部』(集英社) 昭和60年3月
- ③ 増田繁夫氏『冥き途評伝和泉式部』(世界思想社) 昭和62年4月

#### ④ 『更級日記』の読み方

##### 一、冒頭表現

『更級日記』は次のように始まっている。

あづま路の道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふものあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなるひるま、宵居などに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。

いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、京にとく上げたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへと、身を捨てて額をつき祈り申すほどに、十三になる年上らむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所にうつる。

(新編全集 『更級日記』 279頁)

冒頭の「あづま路の道のはて」には、  
あづま路の道のはてなる常陸帯のかごとばかりもあひ見ても  
しがな  
(古今六帖・友則)

歌が踏まえられている。その常陸よりも奥といつたら東国になりそうだが、孝標が赴任したのは上総国(千葉県)なので、地

図上の虚構・文飾が認められる。ここに『源氏物語』の常陸育ちの浮舟との二重写しが存するのかもしれない。あるいは意図的に上総を避けているとも読める。

続く「生ひ出でたる人」(生まれは京都)は作者自身のことだが、それを「人」と三人称として述べている点にも注意が必要であろう。この冒頭は『土佐日記』のパロディと見たい。貫之は女性が日記を書くことを表明したが、孝標女はそれを受けて本当に女性として『更級日記』を書いているのだ。

もちろん『蜻蛉日記』にしても、

かくありし時過ぎて、世の中にいとものはかなくて、ともかくにもつかで、世に経る人ありけり。

とあるのだから、三人称は日記の筆法ということもできる。そして『蜻蛉日記』もそうだが、『更級日記』の冒頭表現は、日記というよりも物語の書き出しに見まがう見事さがある。そして作者は晩年になって自らの人生を振り返り、その起点をそこに置いている。

この主人公は物語好きというより、物語へのあこがれに魂をうばわれた少女(今の小学生くらい)として語られ、世上に広まっている物語を全部見たいという願望を抱いている。「光源

氏」とあるのはもちろん『源氏物語』のことである。この願望は、即ち田舎で育つ作者の抱く京都に対する憧れでもあった。京都でなければ物語も入手できないからである。

そして作者十三歳の年、日記は大きく動き出す。それは父孝標の国司の任期が切れ、京都へ戻ることになったからである。受領にとつては予定のことであるにもかかわらず、作者の願いが叶えられて上京するという書きぶりである。その「十三」という数字には大きな意味がありそうだ（京都には今も「十三参り」がある）。というのも十二進法で考えると、十三は最初の一に戻る数字だからである。これは成人の年齢でもあり、新たな出発の年でもあったのだ（通過儀礼）。女性の大厄が三十七歳なのも、三十六プラス一で納得される。

さて、九月三日に出立した作者は十二月二日に入京している。この三ヶ月の間、物語への願望は消えており、名所旧跡へのこだわりが綴られ、竹芝伝説や富士川伝説などが書き記されている。作者は貴重な受領の赴任の旅を、見事に日記文学として創作しているのである。では数えて十三歳の少女に、一体どこまで書く能力があったのだろうか。もちろん備忘録のようなものはあったかもしれないが、大半は四十年後の回想だろう。少な

くとも後に補完された心情などが鏝められているはずだし、記事の取捨選択さらには創作も含まれているに違いない。もしそうなら、これは単純ないわゆる日記とは称しがたいものである。日記文学としてどこまで虚構が含まれるのかに注意する必要がある。

いずれにしてもこの帰京日記は、『更級日記』全体の二割を占めており、独立しても十分読める。この部分こそは『土佐日記』を意識し、それよりもっと長い旅日記として綴られているかもしれない。そんな思い切った読み方をしていいのではないだろうか。そういう視点から『土佐日記』を見ると、とても女性視点から書かれているとはいえないことが明らかになる。

## 二、物語に耽溺

作者は母方の叔母から『源氏物語』全巻をプレゼントされる。長くなるが全文を引用してみよう。

いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆるままに、この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せたまへと心のうちにいる。親の太秦にこもりたまへるにも、ことごとなくこのことを申して、出でむまにこの物語見はむと思へど見

えず。いとくちをししく思ひ嘆かるるに、をばなる人の田舎より上りたる所にわたいたれば、いとうつくしう生ひなりけりなど、あはれがり、めづらしがりて、かへるに、何をかたてまつらむ。まめまめしき物は、まさなかりなむ。ゆかしくしたまふなる物をたてまつらむとて、源氏の五十余巻、櫃に入りながら、在中将、とほぎみ、せり河、しらは、あさうづなどいふ物語ども、一ふくろとり入りて、得てかへる心地のいれしさぞいみじきや。はしるはしるわづかに見つつ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳のうちにうち臥して引き出でつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。

夜は目のさめたるかぎり、灯を近くともして、これを見るよりほかのことなければ、おのづからなどは、そらにおほえ浮かぶを、いみじきことに思ふに、夢にいと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て、法華経五の巻をとく習へといふと見れど、人にも語らず、習はむとも思ひかけず、物語のことをのみ心にしめて、われはこのごろわるきぞかし、さかりにならば、かたちもかぎりなくよく、髪もいみじく長くなりなむ。光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮

舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、まづいとはかなくあさまし。(298頁)

この叔母は、『蜻蛉日記』の作者道綱母の姉妹であった。ただし年の離れたしかも異母姉妹である。その叔母から『源氏物語』を含めて大量の物語をプレゼントされる。「源氏の五十余巻」とあるのは、既にこの時点で五十四帖が揃っていることがわかる貴重な資料である。「五十四」とあればもつと良かったが、藤原定家の時代には必ずしもそうではなかった。なおここに名の上っている物語は、在中将(伊勢物語)以外は散逸しているものなので、その意味では散逸物語の貴重な資料ともいえる。『源氏物語』以外の作品についても、もつと言及してあげばと惜しまれる。

さて「をばたまもの」章には、叔母から『源氏物語』五十余巻を櫃に入りながらプレゼントされた作者の喜びが表現されている。その中に、

はしるはしるわづかに見つつ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳の内(うち)伏して引き出でつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。

という有名な一文がある。これは高校古文の教科書にもよく採



用されているところなので、習った覚えがある人も多いはずである。

では「はしるはしる」はどんな意味だと教わったのだろうか。かつて高校生だった私は、確か「とびとびに」の意味で教わったように記憶している。そこで参考までに小学館の新編全集の頭注を見ると、

とびとびにの意。他に、胸をわくわくさせ、帰途の車を走らせながら、などの解もある。

と書かれていた。なんと「はしるはしる」には、「胸をわくわくさせ」や「車を走らせながら」という別解もあったのだ。あえて三つの解が掲載されているということは、必ずしも意味が定まっていないからではないだろうか。

参考までに最近の教科書には何と書かれているのか見てみた。第一学習社標準古典の指導書を参照したところ、「はしるはしる」の語句の解説として、

胸をわくわくさせて。ここは「とびとびに」「大急ぎで」「車で走り走り」などとも訳されてきたが、「胸のいみじうはしりけるを」（『枕草子』二百九十七段・びんなきところにて）などの例から、胸の鼓動が激しく打つ意と見て、

「引き出でつつ見る」にかかるとする。この場合、「わづかに……思ふ」が以前の状況である。（140頁）

と別解にまで言及されていた。

他の会社の教科書を含めて、最近では「胸をわくわくさせて」で解しているものが優勢のようである。私が習った頃とは解釈が変更されていることになる。どうしてこんなに大きく解釈が分かれているのだろうか。その理由の一つは、これを現在のこととみるか、それとも過去のことと見るかにありそうだ。わかりやすくいうと、「はしるはしる」をそのまま「わづかに見つつ」につなげると、それは作者のかつての読書体験になる。また「わづかに見つつ」を挿入句とすると、現在の状況になる。構文のとらえ方によって、解釈が割れているのである。

はたしてどちらが正しいのだろうか。もちろんどちらかが正しくて、どちらかが間違っているのではない。どちらも間違っていない、あるいはどちらも正解とはいいたくないので、判断は読者というか教科書会社あるいは教師に委ねられている。だからこそややこしいのである。

繰り返すが、「とびとびに」（とぎれとぎれに・切れ切れに）は過去の読書体験であり、「胸をわくわくさせて」は『源氏物

語』五十余巻を入手した現在の気持ちになる(「大急ぎで」との解も可能)。これをリアルな表現とすると、叔母の家から帰る牛車の中で、一刻も早く自宅に帰って読みたいという作者の胸中をうまく描出していることになる。それも面白い解釈である。

もう一つ、高校では触れられないようだが、「はしるはしる」という用例は、他の作品に見当たらない『更級日記』の孤例(独自表現)であることも、解釈を困難にしている。というのも、単独の「走る」に「とびとび」「わくわく」などという意味はないからである。かろうじて中世の『筑波問答』に、「ただ某のことと御尋ねにつきて、はしるはしるも申さん」(16頁)とあって、「ざっと申しましょう」と訳されているので、これを逆に『更級日記』に援用したのではないだろうか。要するに「はしるはしる」の解釈は、後世の作品の例を典拠にして解釈されていることになる。では「ざっと」がどうして「とびとび」に置き換えられるのだろうか。これで高校生は納得するだろうか。

そういった反省に立って、「とびとびに」が否定されたのかもしれない。その点「胸をわくわくさせて」は、「胸走る」と

いう言葉があることで、優勢になっているのかもしれない。そのため日本国語大辞典は、『更級日記』の本文を引用していながら、「胸をわくわくさせながら」の意味だけ出して、もはや「とびとびに」の意味は掲載もしていない。

しかしながら「胸走る」は、本来「胸騒ぎがする」意味であって、必ずしもびったりしているとはいえない。むしろ「胸鳴る」ならびったりである。第一、『更級日記』の用例に「胸」は付いていないので、これにもいささか飛躍がありそうだ。

幸い前述の『枕草子』の例は、「胸」と「はしる」が離れているので、これなら「はしる」一語で「どきどきする」と解釈できそうだ。同様の例は『蜻蛉日記』にも、「胸つぶつぶとはしるに」(224頁)とあって、これもドキドキさせると訳せる。

ということで、教科書ではこれを「はしるはしる」に援用して、「胸をわくわくさせて」が優勢になったのだろう。もともと「わくわくさせる」と「ドキドキして」は、ニュアンス(期待感・喜びなど)が微妙に異なるのではないだろうか。

こんな簡単な言葉でありながら、「はしるはしる」は比較できる他の用例が皆無(孤例)というところで、解釈が確定できていなかったのである。それを踏まえての単純な疑問だが、何故

高校では他に用例のない珍しい表現だとか、解釈が一つに絞れないと正直に教えないのだろうか。そもそも先生は、こんなややこしい問題が存していることをどれだけ自覚しているのだろうか。

さて、願ひ叶って物語を得た作者の喜びは大きく、「後の位も何にかはせむ」と口にするほどだった（かぐや姫の引用?）。もちろん作者の身分では、入内することもまして后になることも不可能である。なお、ここで作者が名をあげているのは、ヒロイン格の藤壺や紫の上ではなく、身分の低い夕顔と浮舟である。これは作者の身分に近いからであろうか。あるいは自分を物語の登場人物と重ね合わせる（追体験する）のが、当時の物語の読み方だったのだろうか。

さらに『源氏物語』を耽溺する描写が続くが、末尾に「いはかなくあさまし」とありながらも、作者は物語を通して人生を学んでいる（追体験している）ようである。

### 三、猫の登場

『更級日記』の中に挿入されている唐猫の話は、非常に印象的なものであった。

五月ばかり、夜ふくるまで物語をよみて起きぬれば、来つらむ方も見えぬに、猫のなごう鳴いたるを、おどろきて見れば、いみじうをかしげなる猫あり。いづくより来つる猫ぞと見るに、姉なる人、あなかま、人に聞かずな。いとをかしげなる猫なり。飼はむとあるに、いみじう人なれつつ、かたはらにうち臥したり。尋ぬる人やあると、これを隠して飼ふに、すべて下衆のあたりにも寄らず、つと前にのみありて、物もきたなげなるは、ほかさまに顔をむけて食はず。

姉おととの中につとまとはれて、をかしがりらうたがるほどに、姉のなやむことあるに、もの騒がしくて、この猫を北面にのみあらせて呼ばねば、かしがましく鳴きののしれども、なほさるにてこそはと思ひてあるに、わづらふ姉おどろきて、いづら、猫は。こち率て来とあるを、などと問へば、夢にこの猫のかたはらに來て、おのれは侍従の大納言殿の御むすめの、かくなりたるなり。さるべき縁のいささかありて、この中の君のすずろにあはれと思ひ出でたまへば、ただしばしここにあるを、このごろ下衆の中にありて、いみじうわびしきことといひて、いみじう泣くさま

は、あてにをかしげなる人と見えて、うちおどろきたれば、この猫の声にてありつるが、いみじくあはれなるなりと語りたまふを聞くに、いみじくあはれなり。

その後はこの猫を北面にも出ださず思ひかしく。ただ一人ゐたる所に、この猫がむかひゐたれば、かいなでつつ、侍従の大納言の姫君のおはするな。大納言殿に知らせたまつらばやといふかくれば、顔をうちまもりつつなごう鳴くも、心のなし、目のうちつけに、例の猫にはあらず、聞き知り顔にあはれなり。(302頁)

作者の邸に迷い猫がやってくる。その猫はかなり貴重な唐猫だった。それだけでなく、その唐猫は十五歳の若さで亡くなった大納言行成の姫君が転生したものとされている。父の孝標は菅原道真の末裔(兄の定義は文章博士)であり、かつて蔵人として行成(蔵人頭)の部下だったことがある。そういった縁で、大納言の姫君の書道手本を貰い受けていたのであろう。

なおこの猫は、作者の家が火事で焼けた際、「大納言の姫君と思ひかしづきし猫もやけぬ」(304頁)とあって焼け死んでしまったらしい(おそらく猫は紐で繋がれていたであろう)。しかしながら、それについての悲しみも火事の恐怖も日記には

描かれていない。

ついでながら、この猫の記事の前には作者の乳母の死、侍従大納言の姫君の死が記されている。それを受けて転生した猫が登場しているのである。その猫が焼け死んだ後、今度は姉の死が記されている。『更級日記』はそういった死の糸で綴られているともいえる。

ところで平安時代の猫はなんと鳴いたのだろうか。『更級日記』の本文には「猫のなごう鳴いたる」「なごう鳴く」とある。これについて新編全集頭注一四では「なご(和)く」の音便。のどやかにの意。「なが(長)く」ではない。」と書かれている。これについて『蜻蛉日記』には、「鶏の声など、さまざまなごう聞こえたり」(289頁)とあるので、鶏であれば「長く」でもよさそうである。「長く」ではないとしても、これを猫の鳴き声「ニャーゴ」(オノマトペ)とすることもできそうだ。

もう一つ、猫が登場する『源氏物語』若菜上巻を例に出してみたい。六条院で行われた蹴鞠の場面で、女三の宮の御簾を開ける役として効果的に唐猫が用いられている。柏木がその猫を引き取ってかわいがあると、猫は「ねう」(ニャー)と鳴く。この「ねう」は「寝む」に通じることから、エロチックな用いら

れ方をしていることになる。本来、猫の役目はネズミを捕ることだが、唐猫は舶来の高級品ということで、貴族にペットとして飼われていた。『枕草子』にも命婦（五位）という猫が登場しているが、必ずしも古典文学の中の用例は多くない。

ついでながら『竹取物語』でかぐや姫は、

おのが身は、この国に生れてはべらばこそ、使ひたまはめ、いと率ておはしましませんがたくやはべらむ。 (61頁)

と口になっているが、「おのが」は若い女性にとつて非常に珍しい自称表現であった。これが男性（老人）ならば、翁も「おのが生さぬ子」（21頁）といつており、何ら問題はない。しかし当時の若い女性は、決して自分のことを「おの」とはいわなかったようだ。

反対に老女とか尋常ならざるもの（物の怪・妖怪など）に用例が固定している。たとえば『源氏物語』夕顔巻で夕顔の枕元に出現した物の怪は、

おのがいとめでたしと見たてまつるをは尋ね思ほさで、

(164頁)

と口になっている。この表現によつて、明らかに物の怪であることを読み取らなければならないのだが、多くの読者はそのこと

に気付いていない。

そして『更級日記』でも、迷い猫が姉の夢の中で、

おのれは侍従の大納言の御むすめの、かくなりたるなり。

(302頁)

と、大納言（行成）の姫君の生まれ変わりであることを告げている。猫がしゃべることはないのだから、これも尋常ならざるものの言葉である。「おの」の異常性には留意していただきたい。

#### 四、書名の由来

ところで『更級日記』という書名はどのような経緯から命名されたのであろうか。その由来は日記の末尾近くまで明かされない。冒頭の「あづま路の道のはてよりも」云々を見て、『更級日記』という書名との不整合は気にならないのだろうか。

いと暗い夜、六らうにあたる甥の来たるに、めづらしうおほえて、

月も出でて闇にくれたる姨捨になにとて今宵たづね来つらむ

とぞいはれにける。 (359頁)

これは晩年の作者のところに甥が尋ねてきた時に詠まれた歌である。「姨捨」は『古今集』や『大和物語』にある有名な、

わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て

の「姨捨山」伝説を踏まえて詠まれている。なお作者にとつての「更級」は、亡き夫橘俊通が最後に赴任した信濃国(長野県)にある山であり、月の名所(歌枕)として和歌に詠まれている。そしてこの歌によつて「姨捨」ならぬ「更級日記」という書名が付けられた。

しかしそこは作者が訪れたことのない場所であり、夫に対する関心の薄さから考えると、さほど印象深い地名ではなかったはずである。果たして書名に掲げるのにふさわしいのかどうか疑問もある。いずれにせよ物語に耽溺した文学少女の末路として、四十年後に老残の弧愁を「姨捨」とかこつところで日記は閉じられているのである。そうすると、『更級』という書名から晩年の作者が浮上するのだから、作品全体に晩年の作者の思いを投影させなければならなくなる。若い頃の日記にも、晩年の作者が二重写しになっているのである。

さて、作者のもう一人の叔母が『蜻蛉日記』の作者道綱の母であるところから、作者が『蜻蛉日記』を読み込み、その多大

な影響を受けているとする予定調和的な見方もある。しかし作者は道綱の母と違つて、身分の高くない夫俊通のことにはほとんど言及していない(興味を示していない)。それだけ平凡な夫だったのかもしれない。また『蜻蛉日記』が夫兼家の歌を多く含んでいるのに対して、『更級日記』には俊通の歌は一首も掲載されていない(夫の家集にはならない)。文芸などに関心のない夫だったのであろう。

そういった点からすると、『蜻蛉日記』とは執筆動機から違つてことになる。あるいは大江氏の和泉式部が『和泉式部日記』を残しているのに対抗して、菅原氏の孝標女も『更級日記』を残したのだろうか(菅原氏の女であることを誇示?)。

## 五、定家本更級日記

『更級日記』の原本は失われている。唯一、定家が書写した本が残っているだけであった。その本はもともと菅原家に伝來した質のいい本を書写したものである。既に菅原家の本も失われているので、この定家本が現存するすべての『更級日記』の写本の親本であった。

ところが江戸時代に書写されたり出版された本には大きな錯

簡が存しており、ともに内容が把握できる状態ではなかった。そのため『更級日記』は、熱心に読まれることもなかった。大正に至って、宮内庁書陵部の蔵から定家本が発見された。その調査によって、写本の糸が切れた後、列帖装の綴じ誤りが生じていることがわかり、その復元が試みられた。宮内庁に所蔵されていたのが定家本原本だったので、奇跡的に綴じ誤り前の状態に復元され、ようやく『更級日記』の正しい本文が提供されたのである。『更級日記』の研究は、遅れてこの時から始まったといえる。こんな数奇な運命をたどった作品であったことも知ってほしい。

なお『更級日記』にある八十八首のうち六十五首が彼女の自詠なので、小さいながらも家集が編める分量である。ただし孝標女は歌人というよりは散文作家ではないだろうか。そのことは定家本の末尾に、

よはのねざめ、みつのはままつ、みづからくゆる、あさく  
らなどは、この日記の人のつくられたるとぞ。

という定家の勘物が添えられていることから察せられる。「とぞ」とあつて不確かではあるものの、当時そのような伝承があったのだろう。このうち「よはのねざめ」は『夜の寢覚』、「みつのはままつ」は『浜松中納言物語』のことだとされている。他の二作品は散逸して伝わらない。

これを信じれば、孝標女は物語作者としても活躍していたことになる。孝標女の歌は十五首が勅撰集に入っている。ただしすべて『新古今集』以降であり、十五首のうち十三首は『更級日記』から採られている。おそらく定家が『更級日記』から撰出したのであろう。他の二首は『浜松中納言物語』の歌なので、これも孝標女作者説を補強する資料といえそうだ。